

エスニック集団の定住による居住環境の変容と多文化居住への課題

Bangladeshからイギリス及び日本への労働力移動のメカニズム

主査 北原 玲子*1

委員 大月 敏雄*2, ナンディニ・アワル*3

本研究は、Bangladeshからイギリスおよび日本への労働者移動に着目して、受け入れ国におけるBangladesh人の集住傾向と住み分け、公営住宅での生活状況と住宅問題から、多文化居住の現状と課題を明らかにするために、Tower Hamlets・ロンドン特別区と東京都北区で調査を行った。その結果、定住や出稼ぎを目的として移動しているBangladesh人は、民族的出自の繋がりで集住しており、低所得者や生活弱者向けの情報を共有し、公営住宅や行政サービス等の地域資源を活用していることが明らかとなった。

キーワード : 1) 国際労働力移動, 2) 受け入れ国, 3) 居住環境, 4) 過密居住,
5) Bangladesh, 6) Tower Hamlets・ロンドン特別区, 7) 東京都北区

A STUDY ON THE CHANGE OF LIVING ENVIRONMENT BY ETHNIC GROUP'S SETTLEMENT AND SUBJECT TO MULTICULTURAL SOCIETY

The mechanism of manpower movement to Japan and Britain from Bangladesh

Ch. Reiko KITAHARA

Mem. Toshio OTSUKI and Nandini AWAL

In this study, the Bangladeshis' concentrated living situation and housing problem in public housing are investigated to clarify the present condition and the subject of multicultural society in London Borough of Tower Hamlets and Kita-ku, Tokyo with the manpower movement to Britain and Japan from Bangladesh. As a result, it is clarified that the Bangladeshis who are moving for the purpose of settlement and work away from home are living concentrated by the relation of racial family line, sharing the information for low income earners or disadvantaged people, and utilizing local resources, such as housing benefits and services from local government.

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

貧困や失業など母国での様々な要因によって、移住や海外出稼ぎを選び国境を越えていく労働者家族は、より良い労働条件や生活環境を求めて居住地を選択している。そうした国際労働力移動^{注1)}の流れを受けて、欧米の先進諸国や中東およびアジアの新興国では、移民^{注2)}や海外出稼ぎ労働者^{注3)}を受け入れることによって、安価な労働力を大量に確保してきた。その一方、日本では国内産業の基幹となる生産工場の多くが、より安価な労働力を求めて中国や東南アジアなどに移転していく中で、海外からの非熟練労働者の受け入れは極めて限定的に行われてきた。

労働力受け入れ国のプル要因^{注4)}や受け入れ政策は、国の方針や歴史的経緯により大きく異なり、労働力送り出し国から同じプッシュ要因や送り出し政策によって移動してきた移民や海外出稼ぎ労働者でも、受け入れ国側の態勢によって生活状況は大きく異なっている。Bangladesh人という一つのエスニックグループ^{注5)}

の移動を通して、Bangladesh移民が受け入れ先進国のイギリスでどのように受け入れられ、どのような社会問題や住宅問題を抱えているかを把握しておくことは、日本が将来的に迎えるであろう多文化居住^{注6)}のあり方を展望するために、非常に重要だと考えられる。

このような問題意識から、本研究では、Bangladeshとイギリスおよび日本の関係性に着目して、受け入れ国におけるBangladesh人の集住傾向と住み分け、公営住宅での生活状況と住宅問題についての知見をまとめ、多文化居住の現状と課題を明らかにすることを目的としている。

1.2 研究の特徴

本研究では、国際労働力移動を構成する移民や海外出稼ぎ労働者が、独自のエスニックネットワーク^{注7)}を活かして連鎖的に移動することから、目的地によって送り出し国での出身地に偏りが見られ、受け入れ国でもエスニックグループごとに集住を進める傾向があることに着目している。既報¹⁾では、Bangladeshか

*1 東京大学大学院工学系研究科 博士課程

*2 東京大学大学院工学系研究科 准教授

*3 東京大学大学院工学系研究科 博士課程

ら日本への移動がムンシゴンジ県出身者に偏っており、出身地の居住環境^{注8)}に影響を与えていることを報告したが、バングラデシュからイギリスへの移動も同様にシレット県出身者に偏っていることが、バングラデシュ海外居住者福利厚生・海外雇用省（以下、MEWOE）への聞き取りで把握できた。そこで、国際労働力移動による連鎖移民^{注9)}が受け入れ国の居住環境に与える影響を明らかにするために、出身地に基づいた地域的特性に着目して、バングラデシュからイギリスおよび日本への移動を比較研究している。

1.3 既往研究との関連

これまで建築計画の分野においては、国際労働力移動の現象という視点からイギリスおよび日本での移民や海外出稼ぎ労働者の居住環境を捉えた研究はない。イギリスの居住環境に関しては、堀田ら（2001）や高田ら（2011）のように、住宅政策や公営住宅を中心とした住宅供給・管理システムをテーマとした研究が多く為されてきた。中島ら（1989）はタワーハムレッツで調査を行っているが、イギリスの地域住宅政策や住宅管理システムについて報告している。日本の居住環境に関しては、外国人居住問題として集住地域や集住団地での事例研究に留まっている。吉田ら（1996）や韓ら（2007）は、関西地方の在日韓国・朝鮮人集住地区に着目している。稲葉（2008）は新宿区大久保地区の外国人居住を、垣野ら（2010）は神奈川県営いちょう団地の外国籍住民を取り上げている。

国際労働力移動に関わる送り出し国と受け入れ国の双方に着目して移民や海外出稼ぎ労働者の居住環境を捉えた研究として、イギリスにおけるアジア系バングラデシュ人^{注10)}、日本におけるバングラデシュ国籍在留外国人という特定のエスニックグループに着目した本研究は、受け入れ国での集住傾向と集住地域の居住環境の変容を、社会に直接関わる重大な問題と捉え、将来的な多文化居住問題に備えるための実践試みと考えている。なお既報¹⁾において、バングラデシュに関する

基礎的な情報と送り出し政策についてまとめている。

2 研究の概要

2.1 調査対象地

バングラデシュからイギリスへの移動に関してはロンドンのタワーハムレッツ・ロンドン特別区（以下、タワーハムレッツ区）、バングラデシュから日本への移動に関しては東京都北区（以下、北区）を、受け入れ国での集住地として調査対象地に選んでいる。

イギリスは二度の世界大戦を経て深刻な労働力不足を補うために、南アジアを中心とした旧植民地から大量の移民を受け入れてきた。1999年の欧州連合の共通通貨導入で急増した東ヨーロッパからの移民も含め、白人系イギリス人を除いたその他エスニックグループは増加の一途を辿っている。表1によると、2009年時点でイギリスの人口総数の16.65%（54,809,200人中9,127,100人）がその他エスニックグループである。アジア系バングラデシュ人は392,200人で、その内の42.84%（392,200人中168,000人）がロンドンに、ロンドンの28.81%（168,000人中48,400人）がタワーハムレッツ区に集住している。タワーハムレッツ区はロンドンの中心部シティ・オブ・ロンドン（以下、シティ）の東隣に位置しており、ブリックレーンという通りを中心にバングラタウン（バングラデシュ街）が広がっている。かつては、シティと北海をつなぐロンドンの主要な港湾埠頭として、テムズ川沿いには貨物船が停泊するドックが多く建設され、イギリス植民地時代から紅茶のプランテーションが盛んだったシレット県から、輸送船の船乗りとして多くの労働者が上陸してきたことが、タワーハムレッツ区にバングラデシュ移民が集住するきっかけとなっている。

一方、移民を受け入れない政策をとってきた日本は、厳しい出入国管理を維持しながら、海外出稼ぎ労働者を選別して極めて限定的に受け入れてきた。しかし、1980年代後半からのバブル経済期、安価な労働力確保を求める産業界からの強い要望を受けて、1990年に

表2 日本の在留外国人人口の推移^{注12)}

国籍（千人）	2008年	2009年	08-09増加数	08-09増加率(%)
人口総数	127,066.2	127,076.2	10.0	0.0
在留外国人数	2,217.4	2,186.1	-31.3	-1.4
アジア	1,670.2	1,688.9	18.7	1.1
バングラデシュ	11.4	11.2	-0.2	-1.8
中国	655.4	680.5	25.1	3.8
インド	22.3	22.9	0.6	2.7
インドネシア	27.3	25.5	-1.8	-6.6
韓国・朝鮮	589.2	578.5	-10.7	-1.8
ネパール	12.3	15.3	3	24.4
パキスタン	9.9	10.3	0.4	4.0
フィリピン	210.6	211.7	1.1	0.5
タイ	42.6	42.7	0.1	0.2
ベトナム	41.1	41.0	-0.1	-0.2
ヨーロッパ	61.9	61.7	-0.2	-0.3
アフリカ	12.0	12.2	0.2	1.7
北米	67.7	66.9	-0.8	-1.2
南米	389.4	340.9	-48.5	-12.5
ブラジル	312.6	267.5	-45.1	-14.4
ペルー	59.7	57.5	-2.2	-3.7
オセアニア	14.7	14.2	-0.5	-3.4
無国籍	1.5	1.4	-0.1	-6.7
在留外国人比率(%)	1.75	1.72	-	-

表1 イギリスのエスニックグループ人口の推移^{注11)}

エスニックグループ（千人）	2008年	2009年	08-09増加数	08-09増加率(%)
人口総数	54,454.7	54,809.2	354.5	0.7
白:イギリス人	45,626.0	45,682.1	56.1	0.1
その他エスニックグループ	8,828.7	9,127.1	298.4	3.4
白:アイルランド人	579.5	574.2	-5.3	-0.9
白:その他白人	1,879.0	1,932.6	53.6	2.9
混:白人+黒人 カリブ人	301.3	310.6	9.3	3.1
混:白人+黒人 アフリカ人	124.3	131.8	7.5	6.0
混:白人+アジア人	284.8	301.6	16.8	5.9
混:その他混血人	229.7	242.6	12.9	5.6
ア:インド人	1,384.9	1,434.2	49.3	3.6
ア:パキスタン人	970.0	1,007.4	37.4	3.9
ア:バングラデシュ人	376.6	392.2	15.6	4.1
ア:その他アジア人	366.5	385.7	19.2	5.2
黒:黒人カリブ人	610.9	615.2	4.3	0.7
黒:黒人アフリカ人	767.6	798.8	31.2	4.1
黒:その他黒人	122.3	126.1	3.8	3.1
中:中国人	430.8	451.5	20.7	4.8
中:その他	400.5	422.6	22.1	5.5
その他エスニックグループ比率(%)	16.21	16.65	-	-

※白=白人系、混=混血系、ア=アジア系またはアジア系イギリス人、黒=黒人系または黒人系イギリス人、中=中国人またはその他

入国管理及び難民認定法を改正し、熟練労働や専門職に関する在留資格の拡大と、在留中の活動に制限のない日系二世等の受け入れ^{注13)}に踏み切っている。それと共に、研修生および技能実習生制度の拡充が実施され、在留外国人数は2008年まで増加し続けてきた。表2によると、2009年時点で日本の人口総数127,076,183人の内2,186,121人が在留外国人であり、人口比率は1.7%となっている。バングラデシュ国籍在留外国人は全国で11,414人、東京都に30.61%（11,414人中3,494人）が居住しており、北区に17.89%（3,494人中625人）が集住している。北区は東京都の北部に位置しており、戦前は軍事関連施設や軍需工場が集まった工場地域として発展してきた。敗戦後は軍関連の施設や工場が閉鎖撤退し、その跡地に応急簡易住宅や都営住宅、旧公団住宅が建設されていった。住宅需要の減少に伴い、都心に近い比較的安価な高層高密度住宅地として、在留外国人などの新規住民が入りやすい状況である。

2.2 研究の方法

本研究ではイギリスおよび日本で現地調査を行い、調査の方法は地域調査と住宅調査に大別できる。

イギリスでの地域調査では、特別区や住宅協会での聞き取りと資料の収集、NPO団体での聞き取りと資料の収集および業務の参与観察を行っている。住宅調査では、タワーハムレッツ区在住のバングラデシュ移民家族の

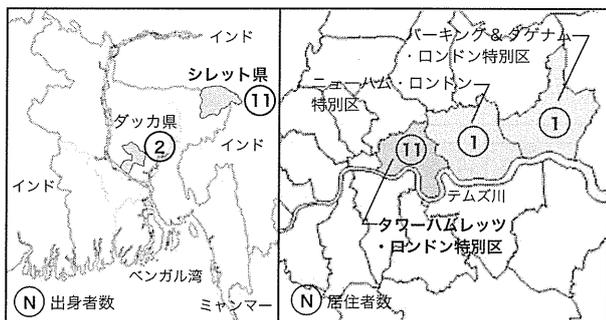


図1 バングラデシュでの出身地の分布

公営住宅にホームステイをしながら、タワーハムレッツ区で移民女性の生活支援を行っているNPO「accounts3」の協力のもと、アジア系バングラデシュ人13人に対する聞き取りと住宅調査（平面図作成・写真撮影）を行っている。表3・図1・図2によると、住宅調査をした13人中11人がタワーハムレッツ区在住であり、本人もしくは家族がシレット県出身である。13人中9人が移民二世または三世であり、13人中10人が既に独立し自分の家族を持っており、配偶者はシレット県から呼び寄せている。また、13人中4人がイギリス生まれであり、幼少期に移動してきた13人中5人の居住年数は23年から28年と長期に渡っていることから、定住を目的とした国際労働力移動となっている。

日本での地域調査では、区やUR都市機構での聞き取りと資料の収集、自治会での聞き取りと資料の収集および業務の参与観察を行っている。住宅調査ではバングラデシュ国籍在留外国人11人に対する聞き取りと住宅内部の調査（平面図作成・写真撮影）を行っている。表4・図3・図4によると、住宅調査をした11人中8人が北区在住であるが、出身地はムンシゴンジ県に限らず多岐に渡っている。親族や友人という繋がりはあるが、出身地の繋がりを意識している調査対象者は少なく、既報りのようなムンシゴンジ県からの連鎖移民は見受けられない。11人中8人が永住者の在留資格を取得した移民一世であり、11人中10人がバングラ

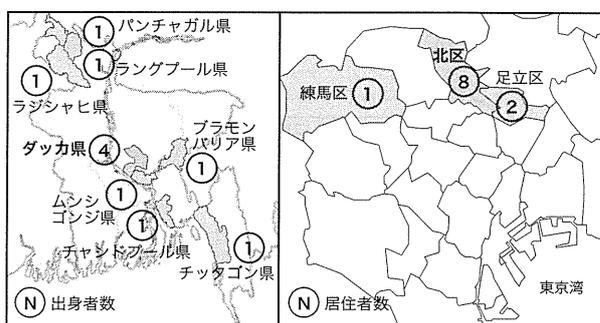


図3 バングラデシュでの出身地の分布

表3 イギリスでの調査対象者の属性

No	性	歳	国籍・ビザ	世代	出身地(家族)	来英年(家族)	在留年数(家族)	居住地
①	男	27	イギリス	移民二世	NH区(S県)	-(1981)	-(29年)	TH区
②	男	28	バングラデシュ 定住権	移民三世	S県	1985	25年	TH区
③	女	28	バングラデシュ 定住権	移民二世	S県	1985	25年	TH区
④	女	40	バングラデシュ 定住権	移民二世	S県	1982	28年	TH区
⑤	女	30	バングラデシュ	移民一世	S県	2000	10年	TH区
⑥	女	35	バングラデシュ 定住権	移民二世	S県	1987	23年	TH区
⑦	女	28	バングラデシュ	移民一世	S県	2002	8年	TH区
⑧	女	37	バングラデシュ	移民一世	D県	2002	8年	TH区
⑨	女	18	イギリス	移民三世	TH区(S県)	(1974)	(36年)	TH区
⑩	女	42	イギリス	移民二世	LC市(S県)	(1966)	(22年)	TH区
⑪	女	38	バングラデシュ 定住権	移民二世	S県	1989	21年	TH区
⑫	男	26	バングラデシュ	移民一世	D県	2007	3年	BD区
⑬	女	33	イギリス	移民二世	TH区(S県)	(1975)	(35年)	NH区

※バングラデシュ・シレット県=S県, バングラデシュ・ダッカ県=D県
タワーハムレッツ・ロンドン特別区=TH区, ニューハム・ロンドン特別区=NH区
パーキング&ダゲナム・ロンドン特別区=BD区, イギリス・ランカスター=LC市

表4 日本での調査対象者の属性

No	性	歳	国籍・在留資格	世代	出身地	来日年	在留年数	居住地
①	男	39	バングラデシュ 永住者	移民一世	M県	2001	10年	北区
②	男	32	バングラデシュ	来日一世	P県	2004	7年	北区
③	男	43	バングラデシュ 永住者	移民一世	CG県	1989	22年	北区
④	男	27	バングラデシュ	来日一世	RP県	2003	8年	北区
⑤	男	31	バングラデシュ	来日一世	D県	2000	11年	北区
⑥	女	33	バングラデシュ 永住者の配偶者等	移民一世	CP県	1997	14年	北区
⑦	女	24	日本(帰化)	移民二世	D県	1992	19年	北区
⑧	男	45	バングラデシュ 永住者	移民一世	D県	1993	18年	北区
⑨	男	37	バングラデシュ 永住者	移民一世	D県	1993	18年	足立区
⑩	男	46	バングラデシュ 永住者	移民一世	BR県	1989	22年	足立区
⑪	女	29	バングラデシュ 永住者の配偶者等	移民一世	RH県	2003	8年	練馬区

※バングラデシュ・ムンシゴンジ県=M県, バングラデシュ・バンチャガル県=P県
バングラデシュ・チャッタゴン県=CG県, バングラデシュ・ラングプール県=RP県
バングラデシュ・ダッカ県=D県, バングラデシュ・チャンドプール県=CP県
バングラデシュ・ブラモンバリア県=BR県, バングラデシュ・ラジシャヒ県=RH県

デッシュから配偶者を呼び寄せて自分の家族を作っている。既報¹⁾で調査した単身で移動した帰国者とは異なり、定住を視野に入れた国際労働力移動へと移行している。

3 ロンドンと東京都での集住傾向と住み分け

3.1 エスニックグループと在留外国人の分類

イギリス統計局による人口統計では、表1のように、白人系・混血系・アジア系・黒人系・中国人系の5種類にエスニックグループを大別した上で、さらに出身国や出身地域に基づいて16種類に細分化している。バングラデシュ移民に関しては、アジア系バングラデシュ人^{注14)}という項目に分けられている。

日本法務省入国管理局による在留外国人統計では、表2に示すように、アジア・ヨーロッパ・アフリカ・北米・オセアニア・南米の6大陸で大別した上で、国籍別に基づいて189カ国に細分化している。本研究では、既報²⁾と同じく、ヨーロッパ・北米・オセアニアの先進諸国を除いた国籍別全国総数上位12カ国と無国籍・その他を対象を絞っている。

3.2 ロンドンのエスニックグループ

表6によると、イギリスの人口総数の14.15% (54,809,200人中7,753,600人) がロンドンに居住しており、そのうち40.48% (7,753,600人中3,139,100人) がその他エスニックグループである。さらにインナーロンドン^{注15)}では、その他エスニックグループの人口比率が44.97% (3,061,100人中1,376,600人) と非常に

多く、アウターロンドン^{注16)}の37.55%や全国の16.65%に比べてその他エスニックグループが集中している。特に、アジア人系バングラデッシュ人に関しては、全国の42.84% (392,200人中168,000人) がロンドンに居住しており、そのうち28.81% (168,000人中48,400人) がタワーハムレッツ区に集住している。

それ以外のエスニックグループに関しては、図6のように、アジア人系バングラデッシュ人とは異なった地域に集住傾向が見られ、民族的出自に基づく住み分けが顕在化している。インナーロンドンでは、アジア人系パキスタン人がニューハム、黒人系カリブ人がルイシャム、黒人系アフリカ人がサザークに集住している。アウターロンドンでは、白人系アイルランド人がブレント



図6 ロンドンのエスニックグループの分布

表6 ロンドンのエスニックグループ人口^{注17)}

エスニックグループ・特別区 (千人)	人口総数	その他エスニックグループ														合計		
		白: イギリス人	白: アイルランド人	白: その他白人	混: 白人+黒人カリブ人	混: 白人+黒人アフリカ人	混: 白人+アジア人	混: その他混血人	ア: インド人	ア: パキスタン人	ア: バングラデッシュ人	ア: その他アジア人	黒: 黒人カリブ人	黒: 黒人アフリカ人	黒: その他黒人		中: 中国人	中: その他
イギリス	54,809.2	45,682.1	574.2	1,932.6	310.6	131.8	301.6	242.6	1,434.2	1,007.4	392.2	385.7	615.2	798.8	126.1	451.5	422.6	9,127.1
エスニックグループ比率(%)	100.00	83.35	1.05	3.53	0.57	0.29	0.55	0.44	2.62	1.84	0.72	0.70	1.12	1.46	0.23	0.82	0.77	16.65
その他エスニックグループ比率(%)	-	-	6.29	21.17	3.40	1.44	3.30	2.66	15.71	11.04	4.30	4.23	6.74	8.75	1.38	4.95	4.63	100.00
ロンドン	7,753.6	4,614.6	169.1	622.3	78.8	42.2	79.4	73.9	480.0	215.1	168.0	157.4	308.2	412.3	64.0	137.6	130.7	3,139.0
インナーロンドン	3,061.1	1,684.4	70.0	286.1	35.2	19.1	30.6	32.6	145.2	69.8	115.2	61.6	148.7	201.9	33.0	67.9	59.7	1,376.6
カムデン	231.2	132.1	6.1	23.4	2.0	1.3	2.5	2.8	13.5	4.5	10.0	4.9	4.8	10.7	1.3	5.1	6.1	99.0
シティ・オブ・ロンドン	11.5	6.9	0.2	2.4	0.1	0.0	0.1	0.1	0.5	0.1	0.3	0.1	0.3	0.0	0.1	0.3	0.1	4.7
ハックニー	216.0	110.4	4.7	20.3	3.0	1.6	2.0	2.4	10.1	3.9	6.6	3.2	15.3	19.8	4.2	4.9	3.7	105.7
ハンマースミス&フルハム	169.7	106.7	5.3	16.9	1.8	1.0	1.8	1.7	6.9	2.9	1.8	2.2	6.3	7.6	1.4	2.5	2.9	63.0
ハaringゲイ	225.5	115.6	7.3	26.9	3.0	1.5	2.7	2.7	9.0	4.3	3.8	4.4	14.9	18.2	2.8	4.2	4.3	110.0
イズリントン	191.8	115.7	6.1	17.6	2.1	1.2	1.8	2.2	8.0	2.7	4.4	2.9	7.1	10.7	1.6	3.8	3.7	75.9
ケンズントン&チェルシー	169.9	96.4	4.3	25.2	1.5	1.0	2.0	2.1	9.4	2.9	1.7	2.5	4.0	6.2	0.9	4.7	4.9	73.3
ランベス	283.3	160.8	5.9	24.5	4.2	2.0	2.6	3.0	10.2	4.7	3.2	3.4	21.3	23.8	4.3	5.4	3.9	122.4
ルイシャム	264.5	150.7	6.4	18.0	4.3	1.9	2.3	2.8	7.6	3.8	2.5	3.9	22.8	23.0	4.5	6.4	3.7	113.9
ニューハム	241.2	92.3	2.9	12.5	3.1	1.6	2.5	2.6	23.5	19.2	19.9	10.4	14.0	23.0	2.9	5.3	5.6	149.0
サザーク	285.6	160.1	5.8	22.4	3.4	2.0	2.5	3.0	11.5	4.5	4.4	3.6	16.2	29.0	4.4	7.7	5.1	125.5
タワーハムレッツ	234.8	111.9	3.1	19.0	1.9	1.0	2.2	1.6	8.3	3.7	48.4	11.4	5.3	8.6	1.3	3.7	3.6	123.1
ウォンズワース	286.6	188.3	6.0	26.4	2.8	1.3	2.6	2.5	11.0	6.5	2.4	4.2	10.2	11.1	2.0	5.0	4.4	98.4
ウエストミンスター	249.4	136.6	5.9	30.6	2.0	1.6	3.2	3.2	15.7	5.9	5.9	4.5	6.4	9.9	1.4	9.1	7.6	112.9
アウターロンドン	4,692.4	2,930.2	99.1	336.2	43.7	23.1	48.7	41.2	334.8	145.3	52.8	95.8	159.4	210.4	31.0	69.7	71.0	1,762.2
バーキング&ダゲナム	175.6	118.6	2.3	8.1	1.9	1.0	1.5	1.3	6.7	5.7	3.7	2.7	4.7	10.7	1.3	3.2	2.3	57.1
バーネット	343.1	204.0	7.9	33.0	2.5	2.0	4.0	3.6	28.7	7.8	3.5	6.9	7.0	15.5	1.8	6.8	8.1	139.1
ベクスレー	225.9	181.1	2.9	8.6	1.5	0.8	1.4	1.2	7.3	1.3	1.2	1.7	3.5	8.4	1.0	2.6	1.6	45.0
ブレント	255.5	97.3	12.4	22.3	2.7	1.7	2.9	2.8	36.4	13.9	2.9	9.2	20.1	17.8	3.2	4.5	5.3	158.1
ブロムリー	310.2	245.8	4.4	14.9	2.6	1.1	2.4	1.9	7.2	2.4	1.6	2.4	7.2	9.7	1.4	2.6	2.5	64.3
クロイドン	342.8	207.0	5.8	18.8	5.0	1.9	4.1	3.6	20.2	11.0	2.8	6.4	22.7	20.4	3.7	5.5	3.7	135.6
イーリング	316.6	158.1	9.7	30.4	3.2	1.7	4.2	3.2	40.9	12.8	2.8	9.1	12.3	13.8	2.0	5.3	7.1	158.5
インフィールド	291.2	167.5	6.7	34.5	3.3	1.7	3.3	3.0	13.4	4.1	4.6	6.1	14.6	17.9	2.8	3.7	4.3	124.0
グリニッジ	226.1	149.5	3.7	14.0	2.5	1.5	2.0	1.9	9.9	3.4	2.5	2.7	7.5	15.1	2.1	4.8	3.2	76.8
ハローウ	228.1	111.1	6.9	18.3	1.9	1.1	2.6	2.2	36.4	11.0	2.1	8.9	8.1	9.2	1.3	3.4	3.7	117.1
ハヴァリング	234.1	195.9	3.0	8.4	1.3	0.6	1.1	1.1	4.8	2.4	1.9	1.7	3.0	5.4	0.6	1.5	1.3	38.1
ヒリングドン	262.5	170.6	6.1	19.6	2.0	1.0	2.9	2.1	23.7	6.9	2.1	5.2	4.9	7.4	1.0	3.5	3.5	91.9
ハウズロー	234.2	129.4	4.4	17.7	1.8	1.0	3.1	2.3	29.9	15.9	2.5	6.2	4.1	7.4	1.0	3.5	3.9	104.7
キングストン・アボン・テムズ	166.7	119.6	2.7	12.3	1.0	0.7	1.7	1.4	7.4	3.3	1.1	3.4	2.4	3.5	0.5	2.5	3.2	47.1
マートン	206.4	129.0	4.3	17.4	2.0	1.0	2.3	2.0	9.7	5.7	2.3	5.3	7.3	8.7	1.4	4.6	3.3	77.3
レッドブリッジ	267.7	140.6	4.9	15.5	2.8	1.4	3.0	2.3	28.6	17.6	8.5	7.9	10.6	15.2	1.9	3.6	3.2	127.0
リッチモンド・アボン・テムズ	189.0	138.4	3.9	17.6	1.1	0.7	1.9	1.5	7.3	2.4	1.1	1.8	1.9	3.5	0.5	1.9	3.4	50.5
サットン	192.2	147.1	3.1	9.7	1.5	0.7	1.8	1.3	5.8	2.6	1.0	2.9	3.4	5.3	0.7	2.2	2.9	44.9
ウォルサム・フォレスト	224.3	119.8	4.0	15.2	3.0	1.5	2.5	2.5	10.5	15.0	4.5	5.3	14.2	15.2	2.9	4.0	4.3	104.6

※白=白人系、混=混血系、ア=アジア系またはアジア系イギリス人、黒=黒人系または黒人系イギリス人、中=中国人系またはその他

ント、アジア系インド人がイーリングに集住しており、イギリスに移動した時期が早いエスニックグループほど、都心の過密居住を避けて郊外に移住している傾向がある。

3.3 東京都の在留外国人

表7によると、日本の人口総数の9.85% (127,076,183人中12,517,299人)が東京都に居住しており、そのうち3.26% (12,517,299人中408,284人)が在留外国人である。さらに、区部では在留外国人比率が4.02% (8,451,067人中340,130人)と、市部の1.69%に比べて割合が多い。バングラデシュ国籍在留外国人に関しては、全国の40.10% (11,162人中4,476人)が東京都に居住しており、その内の13.96% (4,476人中625人)が北区に集住している。

それ他の国籍の在留外国人に関しては、図7に示すように、バングラデシュ国籍在留外国人とは異なった地域に集住傾向が見られ、民族的出自に基づく住み分けが顕在化している。インドネシア、韓国・朝鮮、ネパール、タイが新宿区、パキスタン、フィリピンが足立区、中国、インドが江戸川区、ベトナムが大田区で割合が高くなっている。また、在留外国人数が最も多い中国は、江戸川区の他に新宿区や豊島区でも同様に集住傾向を示している。その他にも韓国・朝鮮は足立区、フィリピンは大田区と、人数が多い国籍に関しては複数の集住地が存在する。新宿区は1980年代から新大久保を中心に多国籍の在留外国人が集住してきたが、その他の区には1990年代以降に来日したアジア諸国からのニューカマーが分散している。

4 タワーハムレッツ区と北区での集住傾向と住み分け

4.1 タワーハムレッツ区のエスニックグループ

タワーハムレッツ・ロンドン特別区による人口統計

では、アジア系バングラデシュ人が人口総数の33.43% (196,095人中65,549人)を占めている。区内においては集住傾向に偏りが見られ、表8によると、特別区内の17地区のうち、スピタルフィールド&バングラタウン (以下、バングラタウン) では57.98% (8,407人中4,874人)がアジア系バングラデシュ人である。バングラタウンに隣接したホワイトチャペルでも51.64% (12,084人中6,240人)と高い数値を示している。

図8によると、地区別その他エスニックグループ比率は、17地区中13地区で50%以上となっており、ロンドンの40.48%に比べると、タワーハムレッツでのエスニックグループの混住はかなり進んでいる。中心市街地の西部ではアジア系バングラデシュ人比率が高い一方で、既成住宅地の北部ではボウイーストの9.95%やボウウエストの13.61%、港湾埠頭の南部ではブラックウォール&キュビットタウンの17.30%やミルウォー



図7 東京都の在留外国人の分布

表7 東京都の在留外国人人口^{注18)}

国籍・地域 (人)	人口総数	日本	在留外国人																	合計		
			アジア																			
			バングラ デシュ	中国	インド	インド ネシア	韓国・ 朝鮮	ネ パ ール	パキ ス タ ン	フィ リ ピ ン	タイ	ベ ト ナ ム	ヨ ー ロ ッ パ	ア フリ カ	北 米	オ セ ア ニア	南 米	ブラ ジ ル	ペ ル ー	無 籍 ・ そ の 他		
日本	127,076,183	124,890,062	1,688,865	11,162	680,518	22,858	25,546	578,495	15,235	10,295	211,716	42,686	41,000	61,721	12,226	66,876	14,179	340,857	267,456	57,464	1,397	2,186,121
国籍別比率	100.00	98.28	1.33	0.01	0.54	0.02	0.02	0.46	0.01	0.01	0.17	0.03	0.03	0.05	0.01	0.05	0.01	0.27	0.21	0.05	0.00	1.72
在留外国人比率 (%)	-	-	77.25	0.51	31.13	1.05	1.17	26.46	0.70	0.47	9.68	1.95	1.88	2.82	0.56	3.06	0.65	15.59	12.23	2.63	0.06	100.00
東京都	12,517,299	12,109,015	341,174	3,476	145,320	9,418	2,819	117,567	5,083	1,427	31,974	6,907	3,246	26,568	2,987	24,046	5,110	8,185	4,423	2,303	214	408,284
区部	8,451,067	8,110,937	284,948	3,080	121,516	8,634	2,160	99,865	4,385	1,248	24,505	5,613	2,359	23,695	2,290	20,054	4,483	4,492	2,705	668	168	340,130
千代田区	46,060	43,330	1,724	6	840	136	8	477	35	2	63	33	58	10	307	60	27	17	3	2	2	2,710
中央区	110,702	105,825	3,661	30	1,705	309	27	1,120	62	11	135	66	13	601	22	432	101	54	28	8	6	4,877
港区	198,859	176,505	10,058	91	2,951	912	147	3,652	60	95	998	197	44	4,882	187	5,655	1,028	528	367	43	16	22,354
新宿区	281,037	247,482	29,295	216	10,037	262	249	14,515	580	38	896	691	158	2,425	94	1,140	265	319	185	37	17	33,555
文京区	187,909	180,730	5,950	30	2,535	157	39	2,316	92	9	209	135	113	601	43	437	84	61	42	10	3	7,179
台東区	165,205	153,388	10,977	46	4,287	548	26	4,665	116	21	763	221	56	414	26	280	55	63	34	7	2	11,817
墨田区	235,571	226,371	8,563	159	3,859	68	20	2,394	51	24	1,348	381	32	302	72	150	38	74	47	12	1	9,200
江東区	436,795	418,131	17,170	97	8,587	809	111	5,073	91	67	1,477	349	72	642	72	453	118	200	93	47	9	18,664
品川区	345,413	333,580	9,508	86	3,811	738	114	2,618	357	66	884	157	175	1,029	78	829	208	177	96	29	4	11,833
目黒区	252,845	244,866	4,953	51	1,493	209	226	1,589	191	39	656	120	39	1,378	94	1,064	356	130	64	15	4	7,979
大田区	671,891	653,660	15,740	206	6,737	383	167	4,170	499	76	2,247	379	408	956	114	757	159	482	342	64	23	18,231
渋谷区	303,103	284,399	10,549	79	3,660	412	142	4,301	142	43	877	205	123	2,346	167	1,932	445	260	121	44	5	15,704
世田区	195,913	184,765	5,295	42	1,862	188	54	1,886	145	17	384	175	86	2,636	114	2,322	379	195	123	20	7	11,148
中野区	300,001	288,345	10,025	79	4,075	218	62	4,049	274	15	436	211	53	708	96	822	165	137	73	18	3	11,656
渋谷区	526,044	514,569	9,300	82	3,686	127	69	3,544	434	35	565	211	77	828	74	912	177	179	85	31	5	11,475
豊島区	243,462	226,299	15,682	167	9,340	120	73	3,766	338	35	415	233	125	670	80	476	133	113	57	22	9	17,163
北区	319,186	303,656	14,603	625	8,098	172	65	3,481	110	35	973	145	67	318	74	246	80	205	148	27	4	15,530
荒川区	184,207	168,498	15,037	94	5,561	79	26	7,859	159	36	665	150	62	200	94	275	37	63	42	9	3	15,709
板橋区	515,791	498,166	16,264	176	9,115	111	85	4,250	126	95	1,461	238	85	471	158	389	76	257	140	36	10	17,625
練馬区	689,187	675,452	11,972	104	4,745	273	134	4,704	200	71	979	250	88	608	148	664	121	215	112	22	7	13,735
足立区	635,080	611,858	22,002	167	7,806	103	140	8,929	96	193	3,682	399	174	334	207	276	53	340	255	54	10	23,222
葛飾区	430,173	415,998	13,391	247	6,250	113	53	4,403	74	86	1,563	231	118	249	160	189	42	137	86	25	7	14,175
江戸川区	649,633	625,044	23,229	200	10,476	2,187	123	6,104	153	139	2,829	436	133	517	106	347	103	276	148	85	11	24,589
市部	3,978,689	3,911,422	55,535	383	23,662	773	643	17,543	691	176	7,186	1,267	875	2,866	690	3,917	623	3,562	1,651	1,576	44	67,237
町行部	87,543	86,626	691	13	142	11	16	159	7	3	283	27	12	7	75	4	131	67	59	2	917	
西多摩郡	59,035	58,339	503	13	129	11	5	79	7	3	210	18	12	5	6	53	2	126	64	58	1	696
島部	28,508	28,287	188	0	13	0	11	80	0	0	73	9	0	2	1	22	2	5	3	1	1	221

ルの15.71%と明らかに低い。また、北部では黒人系、南部では中国人系の人口比率が、他の地区に比べて高いことから、エスニックグループの住み分けが集住と同時に進行している。

4.2 北区の在留外国人

表7では北区の0.20% (319,186人中625人) がバングラデシュ国籍在留外国人と示されているが、表9ではバングラデシュ国籍在留外国人の数値は把握できないため、その他の在留外国人に含まれるとして分析する。表7によると、北区の在留外国人比率は4.87% (319,186人中15,530人) で、バングラデシュ国籍在留外国人は中国、韓国・朝鮮、フィリピンに次いで割合が多い。表9・図9によると、地区別在留外国人比率は、田端新町で8.11% (6,929人中562人) と極端に多い割合を示している以外、田端の4.74%、赤羽南の4.29%、

中里の4.19%と続いており、赤羽台の1.06%が最も低い割合となっている。調査対象者の聞き取りでバングラデシュ国籍在留外国人が多いとされていた東十条は4.10%、王子は2.47%、豊島は1.93%に留まっている。



図8 タワーハムレッツ区の地区別その他エスニックグループとアジア系バングラデシュ人の人口比率

表8 タワーハムレッツ区のエスニックグループ人口注19)

エスニックグループ・特別区(千人)	人口総数	その他エスニックグループ											合計					
		白:イギリス人	白:アイルランド人	白:その他白人	混:白人+黒人+カリブ人	混:白人+黒人+アフリカ人	混:白人+アジア人	混:その他混血人	ア:インド人	ア:パキスタン人	ア:バングラデシュ人	ア:その他アジア人		黒:黒人+カリブ人	黒:黒人+アフリカ人	黒:その他黒人	中:中国人	中:その他
タワーハムレッツ区	196,095	84,151	3,827	12,818	1,548	799	1,329	1,207	3,001	1,477	65,549	1,755	5,214	6,597	917	3,583	2,323	111,944
割合(%)	100.00	42.91	1.95	6.54	0.79	0.41	0.68	0.62	1.53	0.75	33.43	0.89	2.66	3.36	0.47	1.83	1.18	57.09
地区																		
ベスナルグリーンノース	11,750	5,186	267	713	109	30	96	89	167	95	3,915	93	339	369	47	121	114	6,564
マイルエンド&グローブタウン	11,817	5,639	241	648	90	52	69	74	206	79	3,537	119	300	449	46	131	137	6,178
ウィーバース	11,690	5,014	288	618	103	47	80	62	117	67	4,358	140	224	348	61	85	78	6,676
ベスナルグリーンサウス	13,672	4,289	227	705	86	67	80	82	164	128	6,608	137	287	466	60	157	129	9,383
スピタルフィールド&バングラタウン	8,407	1,877	125	547	29	33	35	68	159	113	4,874	109	100	189	24	66	59	6,530
セントダunsスタuns&ステップニーグリーン	12,663	4,956	207	492	71	42	93	45	194	79	5,471	134	241	348	70	106	114	7,707
ホワイトチャペル	12,084	3,358	198	774	44	57	72	66	256	158	6,240	198	179	229	45	106	104	8,726
シャドウエル	12,060	3,772	222	689	40	39	93	41	170	99	5,922	135	254	252	33	174	125	8,288
セントキャサリン&ワッピング	11,250	5,535	278	1,324	51	39	107	58	235	59	2,781	74	168	204	34	184	119	5,715
ポウイースト	8,814	5,732	233	477	119	38	65	63	128	49	877	35	474	284	55	100	85	3,082
ポウウエスト	10,438	6,546	227	647	124	54	66	68	196	53	1,421	45	415	307	42	144	83	3,892
フロンリーパイロウ	11,676	3,882	169	483	171	58	57	98	173	82	4,639	70	467	701	93	241	192	7,694
マイルエンドイースト	11,113	4,356	215	530	151	59	62	75	205	79	3,896	117	478	539	74	122	155	6,757
イーストインディア&ランスブリー	11,495	5,352	211	464	117	67	69	50	126	87	3,237	65	461	629	87	261	212	6,143
ライムハウス	12,464	5,605	225	887	97	58	91	79	135	82	3,687	83	314	516	58	338	209	6,859
ブラックウォール&キュービットタウン	11,911	6,394	193	1,194	64	30	82	83	174	117	2,061	103	223	397	29	558	209	5,517
ミルウォール	12,891	6,658	301	1,626	82	29	112	106	196	51	2,025	98	290	370	59	689	199	6,233

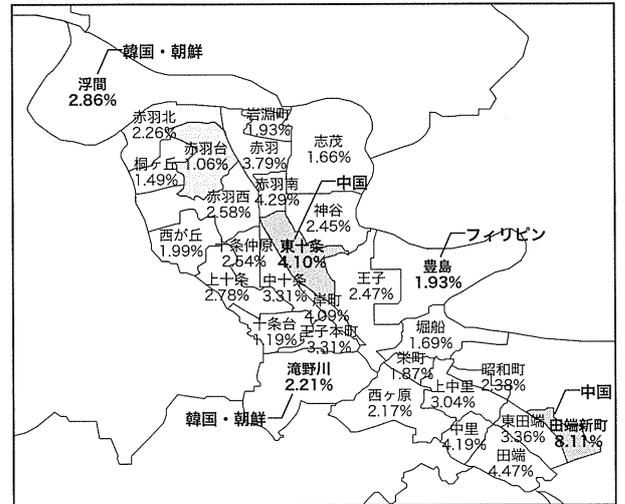


図9 北区の地区別在留外国人の人口比率

表9 北区の在留外国人人口注20)

地区(人,世帯)	人口総数	日本人	在留外国人								合計	
			韓国・朝鮮	中国	フィリピン	タイ	インドネシア	バタナム	ブラジル	ペルー		その他(バングラデシュ含む)
北区	330,412	321,503	2,428	4,145	544	100	32	21	115	4	1,520	8,909
割合(%)	100.00	97.30	0.73	1.25	0.16	0.03	0.01	0.01	0.03	0.00	3.48	2.70
地区												
王子	20,181	19,683	143	196	42	9	1	1	5	1	102	498
豊島	31,028	30,428	188	233	75	9	3	1	2	1	88	600
赤羽	9,613	9,451	46	69	12	2	1	1	2	1	30	162
赤羽北	12,777	12,253	63	312	43	6	2	1	8	1	90	524
赤羽台	5,859	5,665	69	72	8	1	1	1	1	1	45	194
赤羽南	2,613	2,506	20	64	3	1	1	1	1	1	18	107
赤羽西	8,899	8,517	36	180	16	1	2	1	1	1	56	292
中十条	1,091	1,078	3	6	2	1	1	1	1	1	5	23
十条台原	6,410	6,247	27	88	11	3	1	2	1	1	31	163
上十条	13,485	13,110	91	198	19	1	1	1	1	1	65	375
神谷	14,912	14,547	105	147	32	6	1	1	1	1	75	365
赤羽	9,453	9,095	116	151	39	1	1	1	1	1	46	358
西が丘	7,448	7,300	68	59	9	2	1	1	1	1	10	148
赤羽台	16,729	16,297	153	168	25	6	1	4	6	1	69	432
志茂	19,365	19,043	97	145	29	8	1	1	1	1	37	322
岩淵町	4,202	4,121	12	43	6	1	1	1	1	1	16	81
赤羽台	9,746	9,643	18	43	10	3	1	1	1	1	26	103
赤羽南	4,244	4,062	45	86	20	2	1	1	1	1	29	182
赤羽北	14,456	14,129	90	146	13	1	1	3	27	1	46	327
浮間	19,921	19,352	202	220	43	5	4	1	16	1	79	569
桐ヶ丘	7,183	7,076	33	58	7	2	4	1	1	1	3	107
滝野川	31,738	31,036	218	295	32	6	4	2	8	2	135	702
西ヶ原	16,363	16,008	100	170	10	6	1	1	3	1	64	355
柴町	2,671	2,621	10	32	1	1	1	1	1	1	8	50
上中里	6,751	6,546	27	94	7	2	1	1	4	1	69	205
中里	6,798	6,513	69	157	5	2	2	2	1	1	47	285
昭和田	2,772	2,706	12	30	4	1	1	1	1	1	19	66
田端新町	6,929	6,367	168	305	7	3	4	1	2	1	72	562
東田端	3,414	3,290	14	82	5	1	1	1	1	1	22	124
田端	13,451	12,813	185	296	10	13	1	2	11	1	121	638

なお、表9の区分では、北区の地区別でのバングラデシュ国籍在留外国人の集住傾向と在留外国人の住み分けを読み取るには不十分であるが、中国人は田端新町、韓国・朝鮮人は浮間と滝野川、フィリピン人は豊島に比較的多く居住している。

5 バングラデシュ人の居住環境

既報²⁾において、イギリスの住宅問題として連鎖移民による公営住宅での過密居住²¹⁾、日本の住宅問題として在留外国人に対する民間賃貸の入居拒否を報告している。住宅調査における調査対象者が、イギリスではHousing Association住宅（以下、HA住宅）²²⁾、日本ではUR賃貸住宅に偏っていることから、公的な住宅での居住状況に着目して分析を行っている。

5.1 タワーハムレッツ区のバングラデシュ人

5.1.1 イギリスへの移動の経緯

タワーハムレッツ区で住宅調査をした調査対象者は、13人中11人が自身もしくは親世代がシレット県出身である。表12によると、来英の目的はシレット県出身者

の11人中5人が家族呼び寄せであり、結婚の2人以外は祖父や父が就労を目的としている。ダッカ県出身者の2人は夫または本人の進学を目的としていることから、シレット県出身者とダッカ出身者では移動指向が異なっている。シレット県出身者は家族を養うための手段として捉えており、ダッカ県出身者は家族のステップアップのきっかけと考えている傾向がある。また、シレット県出身者は一家の長である父親または祖父が先に単身で出稼ぎに来ており、仕事で定着して生活基盤が整った上で家族を呼び寄せる場合が多い。

5.1.2 イギリスでの経験

表13の現在の職業によると、自身の家族を持っている9人中7人が共稼ぎであるが、低所得者層向けの公営住宅またはHA住宅に居住していることを踏まえると、世帯単位での収入が少ないことが推察される。現在の家族構成によると平均世帯人員が4.2人であり、タワーハムレッツ区の平均世帯人員2.5人を上回っていることから、多世帯居住や扶養児童の多さを示している。

現在の住宅所有形態によると、全体で13人中12人が、

表12 来英前の状況と来英の経緯

No	来英前の職業（家族）	来英の目的（家族）	来英の動機（家族）	来英時の家族構成
①	(父は船乗り)	(家族呼び寄せ)	(同郷の親戚が仕事を紹介)	父(1987年に母と姉を呼び寄せ)
②	(父は学生)	家族呼び寄せ	(先に来英していた父と叔父に合流)	父, 叔父(1985年に母と姉と本人を呼び寄せ)
③	(父は工場作業員)	(就労)	(同郷の親戚が仕事を紹介)	父母, 姉, 本人
④	学生(父は先生)	(就労)	(同郷の親戚が仕事を紹介)	父母, 兄, 姉, 本人
⑤	学生	結婚	同郷の親戚を介してお見合い	夫の母, 夫, 夫の姉夫婦
⑥	学生(父は船乗り)	家族呼び寄せ	先に渡英していた父に合流	父(1987年に母と本人と弟を呼び寄せ)
⑦	学生	結婚	同郷の親戚を介してお見合い	単身(夫は移民二世でイギリス生まれ)
⑧	大学講師	夫の進学	夫が博士課程に進学	夫, 本人, 子ども1人
⑨	(祖父は船乗り)	(家族呼び寄せ)	(不明)	祖父(1980年に祖母と父と叔父が呼び寄せ)
⑩	(父は工場作業員)	(就労)	(同郷の友人が仕事を紹介)	父母
⑪	(父は工場作業員)	家族呼び寄せ	先に来英していた父に合流	父(1989年に母と兄姉と本人を呼び寄せ)
⑫	学生	進学	修士課程に進学	妻, 本人
⑬	(父は船乗り)	(就労)	(同郷の友人が仕事を紹介)	父母

表13 現在の職業と居住状況

No	現在の職業	現在の家族構成(歳)	割当て	住宅(所有形態, 居住年数, 住戸タイプ, 寝室数)	住宅補助	公営住宅購入権	住民組織への参加
①	NPOフルスタッフ	祖母, 母, 兄, 本人, 妹	3寝室	THH公営住宅, 16年, メゾネット(専用庭付き), 3寝室	なし	モーゲージ利用(約£15/月)	なし(コミュニティガーデンの利用のみ)
②	NPOパートスタッフ	本人	1寝室	HA住宅, 5年, フラット, 1寝室	家賃の40%(家賃は約£55.97/週)	なし	なし
③	病院パートスタッフ(夫は会社員)	夫, 本人, 娘(5), 娘(2)	2寝室	HA住宅, 6年, フラット(専用庭付き), 2寝室	なし	モーゲージ利用(約£800/月)	なし
④	無職(夫と死別)	本人, 息子(25), 息子(23), 娘(17), 娘(15), 娘(9)	4寝室	HA住宅, 3年, トリプレット(専用庭付き), 4寝室	なし	モーゲージ利用(約£1,000/月)	なし
⑤	主婦(夫は交通安全取締官)	夫の母, 夫, 本人, 息子(7)	3寝室	HA住宅, 3年, トリプレット(専用庭付き), 3寝室	なし	モーゲージ利用(約£1,200/月)	なし
⑥	NPOパートスタッフ(夫はタクシー運転手)	夫, 本人, 息子(6), 息子(2)	2寝室	HA住宅, 3年, メゾネット(専用庭付き), 2寝室	家賃の40%(家賃は約£110/週)	なし	なし
⑦	小学校パート指導助手(夫は広告代理店経営)	夫, 本人, 娘(6), 息子(2)	3寝室	HA住宅, 8年, フラット, 1寝室	家賃の47%(家賃は約£50/週)	なし	なし(子どもの交流イベントへの参加のみ)
⑧	保育園フル指導助手(夫は会社員)	夫, 本人, 娘(9)	2寝室	HA住宅, 3年, フラット, 1寝室	なし(市民権がないため)	なし	なし
⑨	保育園パート指導助手(兄は会社員)	兄夫婦, 息子(3), 兄, 本人	4寝室	HA住宅, 3年, メゾネット(専用庭付き), 3寝室	家賃の40%(家賃は約£130/週)	なし	なし
⑩	小学校パート指導(夫は肉屋経営)	夫, 本人, 息子(22), 娘(20), 娘(17), 息子(15), 娘(11)	4寝室	HA住宅, 13年, メゾネット, 3寝室	なし	モーゲージ利用(約£1,100/月)	なし
⑪	主婦(夫は工員)	夫, 本人, 娘(15), 息子(12)	3寝室	HA住宅, 13年, フラット, 2寝室	なし	モーゲージ利用(約£800/月)	なし
⑫	大学院生(妻はNPOパートスタッフ)	本人, 妻	1寝室	民間賃貸住宅, 1年, フラット, 1寝室	なし(市民権がないため)	なし	なし
⑬	不動産会社経営	夫, 本人, 娘(5), 息子(4), 娘(2)	3寝室	HA住宅, 2年, フラット, 3寝室	家賃の40%(家賃は約£110/週)	なし	なし

※タワーハムレッツ・ロンドン特別区=TH区, ニューハム・ロンドン特別区=NH区, パーキング&ダゲナム・ロンドン特別区=BD区

タワーハムレッツ区に限っては11人全員が公営住宅またはHA住宅という公的な住宅に居住している。家族構成を見ると、平均世帯人員が4.2人であり、タワーハムレッツ区平均2.5人^{注23)}を大幅に上回っており、扶養家族が多い傾向がある。世帯人員が多いことから、入居が申請できる住宅の割り当て寝室数^{注24)}は12人中10人が3寝室以上となっており、公営住宅が最も多く供給している2寝室(39.5%)^{注25)}では寝室数が足りない場合が多い。調査対象者の寝室数と割り当て寝室数を照らし合わせると、12人中5人が寝室数が不足している過密居住と判断できる。

また、公営住宅またはHA住宅に住んでいる12人中5人が住宅補助^{注26)}を受けており、12人中6人がモーゲージを利用して公営住宅購入権^{注27)}を行使している。⑧⑩以外の、シレット県出身で自身または配偶者がイギリス国籍や市民権を取得している10人は、定住者の特権として低所得者層向けの住宅や福祉の行政サービスを受けている。その一方で、公営住宅およびHA住宅において、居住環境の自主管理の役割を担っている住民組織への参加は見られない。自らの居住環境を改善するという意識は少なく、コミュニティガーデンの利

用や子どもの交流イベントへの参加といった個人的な活動に限られている。

5.1.3 タワーハムレッツ区の調査対象者⑦の居住環境

調査対象者⑦はホワイトチャペル駅から徒歩5分のHA住宅に、住宅補助を受けて8年間入居している。図12のように、本人は娘が通っている自宅から徒歩3分の小学校にパートタイムで働いており、息子の保育園への送り迎えを含めて日常的に徒歩で移動している。同じシレット県出身の友人と週1回習っているコミュニティセンターでのエアロビクスや、毎週金曜に通っているモスクにも徒歩で移動しており、地下鉄やバスなどの公共交通は週末家族で出かける以外はほとんど利用していないという。ハラルフードは徒歩20分のバングラタウンの店で購入しており、夫が経営している会社も同じ地区にあるため、家族での買い物や外食を目的によくバングラタウンに通っている。子ども2人は公立の保育園と小学校に通っているため英語しか話せず、夫婦間のベンガル語以外は自宅ではほぼ英語を使って会話している。妻は近所のバングラデシュ人の子どもを集めて、自宅で週1回アラビア語教室を開いている。

HA住宅は図13のような4階建て階段室型のフラット式住宅^{注28)}であり、図15のようにキッチン・ドローイングルーム・浴室兼トイレ、1寝室がある。8年前の入居当初は夫婦2人で割り当て寝室数は1寝室であったが、現在は家族が増えて夫婦と子ども2人(娘6歳、

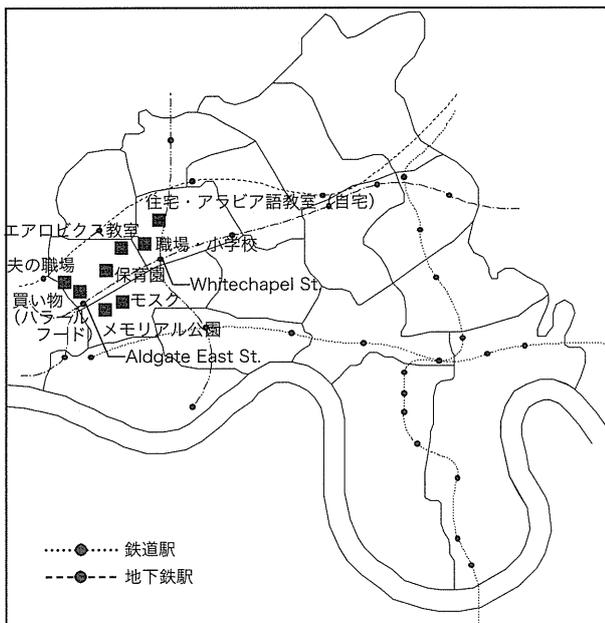


図12 調査対象者⑦の生活拠点

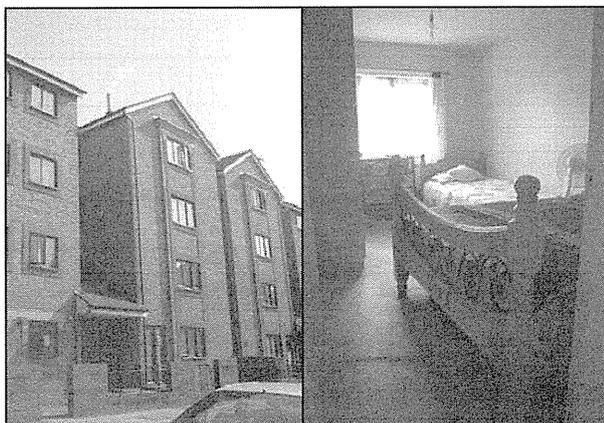


図13 フラット式HA住宅

図14 調査対象者⑦の寝室

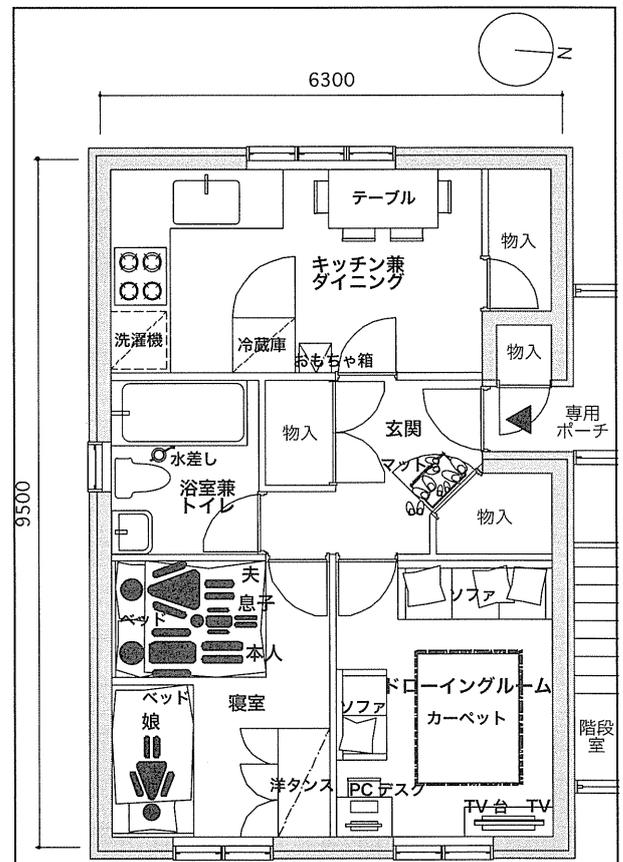


図15 調査対象者⑦の住宅：平面図

息子2歳)の4人世帯で、寝室の割当ての基準によれば、夫婦に1寝室、男女の子どもに各1寝室、合計で3寝室が求められる。現在は子どもが幼いため1寝室に4人で就寝しているが、将来的には、ドローイングルームで使っている部屋を寝室にするか、3寝室の住宅に転居するかの検討が必要とされる。

5.2 北区のバングラデシュ人

5.2.1 日本への移動の経緯

住宅調査をした11人中4人がダッカ県出身であり、その他の出身地も個別の県に広がっているため、既報のようにムンシゴンジ県からの連鎖移民は見られない。表14によると、来日前の職業は11人中8人が学生であり、来日の目的は11人中8人が日本語学校を経ての大学や専門学校への進学となり、ステップアップを目的としている。来日時の家族構成は11人中10人が単身であるが、その後、11人中7人が結婚をきっかけにバングラデシュから配偶者を呼び寄せており、日本で生まれた子どもの多くは既に学齢期に達している。11人中10人が来日時から合法的な在留資格を所持しており、観光で入国した1人も日本語学校への進学で就学の在留資格を取得している。

5.2.2 日本での経験

表15によると、現在の職業は11人中10人が会社員であり、11人中2人のみが共稼ぎである。現在の家族構成を見ると、平均世帯人員が3.5人であり、北区の平均世帯人員2.0人^{注29)}を上回っており、扶養家族が多い傾向がある。現在の住宅所有形態は、11人中9人が公営住宅および公的賃貸住宅(UR賃貸住宅、都営住宅、

都民住宅)に居住しており、北区では8人中7人となっている。収入と世帯構成が入居申請で限られている都営住宅以外は、自ら収入に見合った家賃と間取りで住宅を選んでいるため、11人中8人は個室を確保できるが、中にはロンドンの過密居住に等しい居住状況が見られる。

住民組織への参加に関しては、11人中5人が自治会に入っており、公営住宅の2人は自治会の役員をしている。UR賃貸住宅の3人は会費のみ収めており、自治会の会合には日本語能力の問題から参加することを躊躇している。UR賃貸住宅で入会している③は、自治会を通して団地内の集会所を個人的に使用しており、バングラデシュ人同士の集まりに利用している。

その他、調査対象者への聞き取りによれば、これまでの経験から、民間賃貸への入居が拒否されたこと、日本人の保証人が必要と言われたことなどから、民間の不動産業者によって在留外国人への対応が異なっていることがわかった。その点、入居手続きが均一で分かりやすいUR賃貸住宅では、保証人の問題がなく、礼金・手数料・更新料が不要な点から、民間賃貸より入居しやすいと評価されている。

5.2.3 北区の調査対象者③の居住環境

調査対象者③は王子神谷駅前のUR賃貸住宅に15年間入居している。図15のように、職場は地下鉄と鉄道で秋葉原に通っており、金曜の特別礼拝にはお昼休みを使って広尾のモスクに通っている。電車を使って移動する職場とモスク以外は自宅周辺の施設を利用しており、徒歩や自転車で移動している。買い物に関しては、平日は通勤の行き帰りに利用できる団地内商店街

表14 来日前の状況と来日の経緯

No	来日前の職業	来日の目的	来日の動機	来日時の家族構成	来日時の在留資格
①	会社員	進学	同郷の先輩が学校を紹介	単身(1999年に来日した弟と合流)	就学
②	会社員	就労	バングラデシュで日本企業が求人募集	単身(2006年に妻を呼び寄せ)	技能
③	学生(大学)	進学	同郷の友人が仕事を紹介	単身(1994年に妻を呼び寄せ)	就学
④	学生(高校)	進学	同郷の先輩が学校を紹介	単身	就学
⑤	学生(高校)	進学	日本の奨学金がもらえた	単身(2010年に妻を呼び寄せ)	留学
⑥	学生(高校)	進学	先に来日した兄の紹介	単身(1988年に来日した兄と合流)	就学
⑦	幼児	就労	先に来日した父の呼び寄せ	母と本人(1987年に来日した父と合流)	家族滞在
⑧	学生(大学)	就労と進学	同郷の友人が仕事を紹介	単身(1996年に妻を呼び寄せ)	就学
⑨	学生(大学)	進学	日本の奨学金がもらえた	単身(2001年に妻を呼び寄せ)	留学
⑩	学生(大学)	進学	同郷の友人が学校を紹介	単身(1992年に妻を呼び寄せ)	観光⇒就学
⑪	学生(大学)	結婚	同郷の親戚を介してお見合い	単身(1994年に来日した夫と合流)	配偶者

表15 現在の職業と住宅事情

No	現在の職業	現在の家族構成(歳)	現在の住宅(所有形態、居住年数、住戸タイプ)	家賃	住民組織への参加
①	会社員	本人、妻、息子(7)	UR賃貸住宅、2年、2DK	約10万円	なし(知っているが興味ない)
②	会社員	本人、妻、息子(0)	UR賃貸住宅、3年、2DK	約10万円	なし(知らない)
③	会社員(妻は自宅で英会話教室)	本人、妻、娘(19)、娘(15)、息子(9)	UR賃貸住宅、15年、2DK	約10万円	自治会に入っている(会費のみ)
④	会社員	本人(妻はカナダで別居)	UR賃貸住宅、7ヶ月、1DK	約7.5万円	なし(知っているが時間が無い)
⑤	会社員	本人、妻	UR賃貸住宅、3年、2DK	約11万円	自治会に入っている(会費のみ)
⑥	主婦(夫は会社員)	夫、本人、娘(5)、娘(3)	UR賃貸住宅、6ヶ月、3DK	約12万円	なし(知っているが時間が無い)
⑦	専門学校生(父は会社員)	父、母、本人、弟(8)	都営住宅、9年(建替えて転居)、3DK	約5万円	自治会の班長をしている
⑧	会社員	本人、妻、息子(13)、娘(9)	民間賃貸(集合住宅)、13年、2K	約7.5万円	なし
⑨	会社員(妻はパン屋でパート)	本人、妻、息子(8)	都民住宅、5年、3LDK	約10万円	なし
⑩	会社員	本人、妻、娘(17)、娘(15)、息子(5)	民間分譲(中古、集合住宅)、4年、3LDK	約2300万円(ローン)	自治会に入っている(会費のみ)
⑪	自営業	夫、本人、息子(4)、娘(1)	都営住宅、2年、3DK	約5万円	自治会の副会長をしている

を利用し、休日は東十条商店街や赤羽の大型ショッピングセンターに家族と自転車で移動している。ハラルフードの購入は、東十条もしくは赤羽の店に自転車で通っている。現在大学生である長女を含めた子ども3人は自宅から徒歩10分の公立の小中学校に通っており、自宅以外では日本語を用いて生活している。自宅ではベンガル語を用いているため、妻は日本語を話せないが、近所のバングラデシュ人の子どもを集めて自宅で週1回英語教室を開いている。

UR賃貸住宅は図16のような11階建て片廊下型の住棟であり、図18のようにダイニング兼キッチン・和室・和室・浴室・トイレの2DKに居住している。15年前の入居当初は夫婦2人と子ども2人（娘4歳、娘0歳）だったが、現在は家族が増えて夫婦と子ども3人（娘19歳、娘15歳、息子9歳）の5人世帯で、南側の和室に夫婦と息子が、北側の和室に娘2人が就寝している。部屋の間仕切りが全て襖で音や気配が気になり、個室としてのプライバシーが保ちづらく、子どもの成長に伴い、個室の確保が問題となることが調査対象者への聞き取りでわかった。

6 まとめ

バングラデシュとイギリスおよび日本の関係性に着

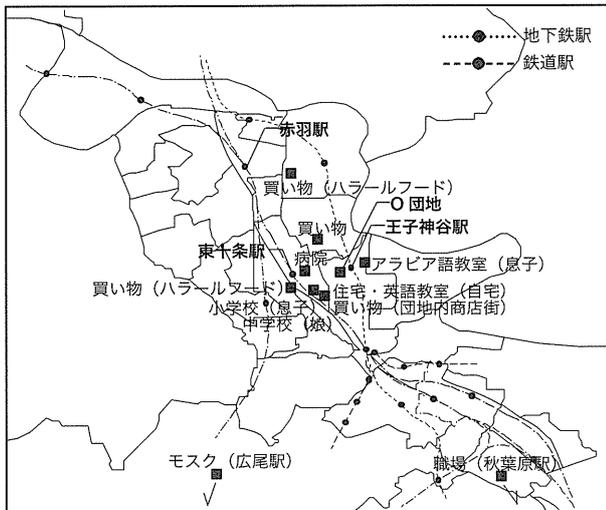


図15 調査対象者③の生活拠点

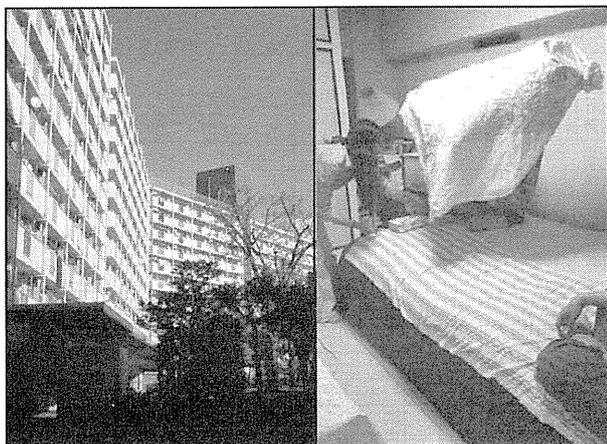


図16 UR賃貸住宅

図17 調査対象者③の寝室

目して、アジア系バングラデシュ人の集住地であるタワーハムレッツ区、バングラデシュ国籍在留外国人の集住地である北区の居住環境について調査した結果として、以下の5点が明らかとなった。

①バングラデシュ人の集住傾向

タワーハムレッツ区では人口の33.43%がアジア系バングラデシュ人であり、特にバングラタウンは57.98%と極端に集住している。北区では人口の0.20%がバングラデシュ国籍在留外国人を割合は少ないが、全国で最も集住している地域である。ただし、中国、韓国・朝鮮、フィリピンに次いで4番目に多い在留外国人であり、タワーハムレッツ区のように単独のエスニックグループの集住地とは見なせない。

②エスニックグループの住み分け

タワーハムレッツ区では、西部にはアジア系バングラデシュ人、北部では黒人系、南部では中国人系と、エスニックグループの住み分けが進んでいる。北区でのバングラデシュ国籍在留外国人の住み分けは現在の統計資料では把握できないが、中国人が田端新町、韓国・朝鮮人が浮間と滝野川、フィリピン人が豊島で割合が多いことから、バングラデシュ人も特定の地区に偏っている可能性がある。

③公的な住宅への偏り

タワーハムレッツ区では13人中12人が公営住宅またはHA住宅に居住し、住宅補助や公営住宅購入権など低所得者向けの行政サービスを受けている。北区では

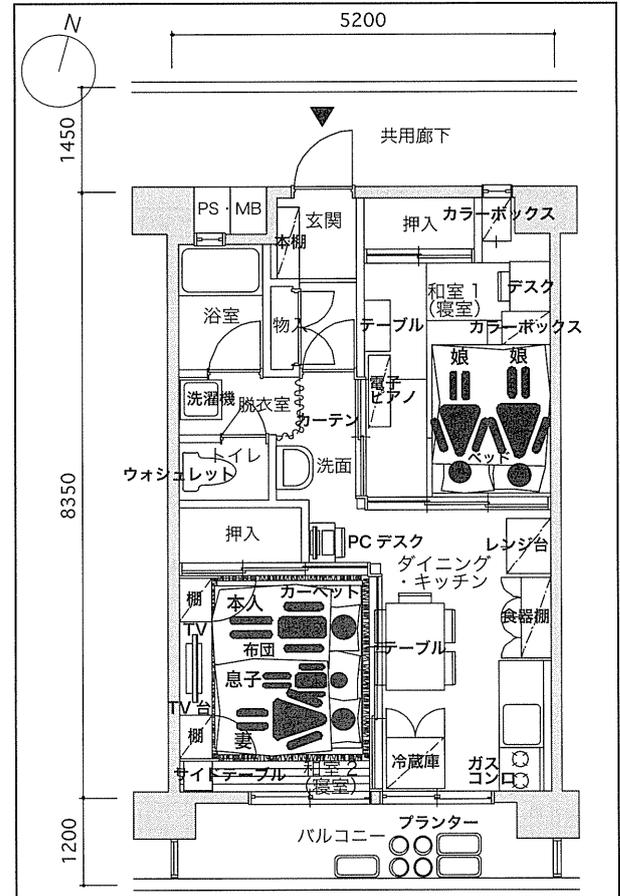


図18 調査対象者③の住宅：平面図

公営住宅または公的賃貸住宅に11人中9人が居住しており、入居手続きが簡易なUR賃貸住宅の割合が高く、公的な住宅の利点を活かしている。

④バングラデシュ人の居住環境と住宅問題

タワーハムレッツ区では、多世帯居住や扶養児童の多さにより寝室の確保が困難であり、公営住宅およびHA住宅に居住している12人中5人が過密居住となっている。北区では11人中8人が個室を確保できるが、襖を使った続き間や、ダイニングとリビングの兼用が多いことから、プライバシーの確保は難しい状況である。

⑤住民組織への参加

調査対象者の多くは、近隣の居住環境を自ら維持管理するという意識が低く、その必要性も感じていない。東京都営住宅での輪番制の自治会役員以外に、調査対象者の自主的な活動参加は見られず、住民組織の活動への理解不足と近隣とのコミュニケーション不足が原因と考えられる。

よって、タワーハムレッツ区と北区に居住しているバングラデシュ人は、国籍、出身地、親族や友人関係といった民族的出自に基づいて集住しており、低所得者や生活弱者向けの情報を共有し、公営住宅や行政サービス等の地域資源を定住への手段として活用している。日本においては、在留外国人の滞在の長期化や定住化が進んでおり、今後ますます公営住宅への依存が高まる可能性は大きい。将来的な多文化居住に備えて、日本の行政もイギリスと同様に公営住宅におけるエスニックグループ別の居住状況を抑えておくことは非常に重要である。定住者としての居住環境への意識と地域社会への参画を向上していくためには、まず、公営住宅での個別の状況を踏まえた上で、在留外国人の理解度やニーズに応じて働き掛けていく必要がある。

なお、本研究で得られた知見は、国際労働力移動の事例研究として一定の成果は得られているが、バングラデシュ人特有のものかどうかは、今後、他のエスニックグループとの比較研究が必要とされるため、これから進めていく個別のエスニックグループの居住環境に関する研究での課題として取り組んでいきたい。

<注>

- 1) 「国際労働力移動」という用語に関して、本論における解釈として文12)を参照し、「労働力を担う者が国境を越えて、他国に就労機会を求めて移動していくこと」と定義する。この移動はより高い所得を求める経済的動機によって引き起こされ、開発途上国から先進国への移動という流れをなしている。
- 2) 「移民」という用語に関して、本論における解釈として文12)を参照し、「人口移動には内部移動と外部移動があり、この外部移動において国境を越える場合は国際人口移動と呼び、移動者を移民」と定義する。途上国の人口爆発、先進諸国の出生減、労働力不足により国境を越える移民は、21世紀に地球規模で直面する全世界的な問題である。
- 3) 「海外出稼ぎ労働者」という用語に関して、本論における解釈として文12)を参照し、「母国での労働市場が狭いため、一定期間、別の国で就労している労働者」と定義する。季節工・臨時工として、低賃金と不安定な労働条件下に置かれることが多い。現在、開発途上国からの外国人労働者の増加が、

先進諸国で社会問題化している。

- 4) 「プッシュ=プル要因」という用語に関して、本論における解釈として文12)を参照し、「農村から都市への出稼ぎ者、移住民、第三世界から先進国への移民など人口・労働力の移動の原因について、その土地を離れることになった要因をプッシュ要因、移住先からの誘因をプル要因」と定義する。
- 5) 「エスニックグループ」という用語に関して、本論における解釈として文12)を参照し、「言語、宗教、歴史的集合体験等の文化的指標による集団的境界をもち、集団メンバーの所属意識により括られるカテゴリーである」と定義する。
- 6) 「多文化居住」という用語に関して、本論における解釈として文11)文12)を参照し、「生活様式や社会習慣、ものの考え方などが民族的出自によって異なる文化を互いに尊重し共生すること」と定義する。
- 7) 「エスニックネットワーク」という用語に関して、本論における解釈として文11)を参照し、「エスニックグループを構成する諸個人や集合体がつくり合う関係を指示する概念」と定義する。親族・近隣・友人などの間に広がるエスニックグループへの帰属関係に基づき、個人の行動に影響を与え、個人が抱える課題の解決に寄与する。
- 8) 「居住環境」という用語に関して、本論における解釈として文11)を参照し、「人間の住生活とそれを取りまく身近な地域の諸条件を指す。大別して、住宅・居住地・近隣など生活を維持するための物理的条件と、社会関係・家族関係・生活習慣など文化に基づく社会的条件に分けられる」と定義する。
- 9) 「連鎖移民」という用語に関して、本論における解釈として文14)を参照し、「一国からの移民の出身地が、その一国のなかでも比較的限定された狭い地域からの出身者である現象」と定義する。一人の移民の成功が、同じ地域の他の人々を移民へと駆り立てる。
- 10) 「アジア系バングラデシュ人」はイギリス国家統計局が統計に用いているエスニックグループの名称「Asian or Asian British:Bangladeshi」の和訳として用いており、本論ではバングラデシュ出身の移民を総称している。
- 11) イギリス国家統計局の「2008-2009年人口推計」を参照し、筆者算定および作成
- 12) 法務省入国管理局の「平成20,21年在留外国人統計」および総務省の「平成20,21年住民基本台帳人口」を参照し、筆者算定および作成
- 13) 1990年に出入国管理及び難民認定法が改正され、在留資格制度が再編されている。許容される活動内容、あるいは地位・身分等に基づき、別表において27の在留資格を設けている。その中で、日系二世に対して「日本人の配偶者等」、日系三世に対して「定住者」という日本での活動に制限がない在留資格を与え、実質的に安価な労働力として受け入れている。文21)参照
- 14) 「アジア系バングラデシュ人」はイギリス国家統計局が統計に用いているエスニックグループの名称「Asian or Asian British:Bangladeshi」の和訳として用いており、本論ではバングラデシュ出身の移民を総称している。
- 15) インナーロンドンとはロンドンの都心部を示し、中心業務地域のシティオブロンドン(City of London)と、その外周に位置する小規模工業や商業、住宅が混在する13のロンドン特別区を含んでいる。
- 16) アウターロンドンとはロンドンの外縁部を示し、インナーロンドンを囲む宅地開発が進む郊外の19のロンドン特別区を含んでいる。
- 17) イギリス国家統計局の2009年人口推計を参照し筆者算定および作成
- 18) 日本法務省入国管理局および東京都総務局統計部の2009年在留外国人統計を参照し筆者算定および作成
- 19) イギリス国家統計局の2009年人口推計を参照し筆者算定および作成
- 20) 東京都総務局統計部の2005年国勢調査 東京都区市町村別報告を参照し筆者算定および作成
- 21) 「過密居住」という用語に関して、本論における解釈として文10)を参照し、「居住密度が一定の限界を超えた状態」と定義する。イギリスの居住密度は住戸面積ではなく、プ

- イバシーを確保できる寝室数と性別世帯人員数が単位となっており、夫婦に1寝室、同性の子ども二人に1寝室と、寝室数で住宅が割り当てられる。
- 22) 「HA住宅」という用語に関して、本論における解釈として文10)を参照し、「特別区から移管された公営住宅およびその他施設で構成される近隣エリア」と定義する。
- 23) 2001年国勢調査に基づくタワーハムレッツ・ロンドン特別区統計を参照し筆者算定および作成
- 24) 家庭内性犯罪を防止する目的で、親子や異性の兄弟姉妹の就寝分離が必要とされていることがタワーハムレッツホームズでの聞き取りでわかった。プライバシーの確保が非常に重要視され、入居申請できる公営住宅での寝室の割当てが「タワーハムレッツ・ロンドン特別区：公営住宅入居申請基準」で規定されている。
- 25) 公営住宅の移管を進めているタワーハムレッツ・ロンドン特別区では、特別区直轄で住宅サービスを供給しているタワーハムレッツホームズが公営住宅の管理・修繕・運営を取りまとめている。タワーハムレッツホームズでの聞き取りの際に入手した資料によると、公営住宅が供給している住戸タイプは、0寝室(4.7%)、1寝室(21.7%)、2寝室(39.5%)、3寝室(28.3%)、4寝室(5.0%)、5寝室(0.7%)、6寝室(0.1%)、7寝室(0.1%)という割合になっている。
- 26) 「住宅補助」という用語に関して、本論における解釈として文6)を参照し、「家賃負担の軽減を図るために公的に提供される補助金」と定義する。個々の借家人に支払う方式と家主側に支払う方式があり、イギリスの住宅補助は後者である。
- 27) 「公営住宅購入権」という用語に関して、本論における解釈として文10)を参照し、「居住中の公営住宅を持家として所有する権利を与える居住者優先の制度」と定義する。居住者がモーゲージ(抵当権)を使い不動産を担保にした住宅ローンを借り、行使期間内に所定の金額で公営住宅を買い取る。
- 28) 「フラット式住宅」という用語に関して、本論における解釈として文10)を参照し、「各住戸が一層で構成されている集合住宅の住戸形式」と定義する。
- 29) 東京都総務局統計部の2005年国勢調査 東京都区市町村別報告を参照

<参考文献>

- 1) 北原玲子, 大月敏雄: バングラデシュから日本への出稼ぎ労働者の居住環境に関する研究 -国際労働力移動による連鎖移民が出稼ぎ帰国者の出身地に与える影響-, 日本建築学会計画系論文集, 第668号, pp. 1761-1770, 2011
- 2) 北原玲子, 大月敏雄: 国際労働力移動に伴うエスニックグループの定住と多文化居住環境に関する研究 -その1 受け入れ国の政策と住宅問題についての考察-, 日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸), pp. 335-336, 2011
- 3) 堀田祐三子, 塩崎賢明: イギリスにおける公営住宅移管事業の変化と地域住宅会社の役割, 日本建築学会計画系論文集, 第545号, pp. 251-258, 2001
- 4) 高田光雄, 神吉紀世子, 安枝英俊, 岡本陽平: ロンドンにおける公営高層住宅と民営高層住宅の概要 -ロンドンにおける公営高層住宅団地の再生事業に関する研究 その1-, 日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸), pp. 113-114, 2011
- 5) 中島明子, 鈴木浩, 藤田忍, 笠原秀樹, 前田昭彦, 瀬戸口剛: イギリスにおける地域住宅政策に関する研究 その2 ~ロンドン・タワー・ハムレット区の住宅管理システム, 日本建築学会大会学術講演梗概集(九州), pp. 579-580, 1989
- 6) 吉田友彦, 三村浩史: 在日韓国・朝鮮人集住地区における居住アイデンティティの表現に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, No. 31, pp. 559-564, 1996
- 7) 韓勝旭, 高田光雄, リム・ボン, 神吉紀世子: 権利関係から見た在日コリアンが集住する長屋ブロックの空間変容, 日本建築学会計画系論文集, 第619号, pp. 93-99, 2007
- 8) 稲葉佳子: 公営住宅における外国人居住の実態に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, No. 43-1, pp. 66-72, 2008
- 9) 垣野義典, 初見学: 外国籍住民の郊外団地居住の実態, 日本建築学会計画系論文集, 第75巻 第652号

- , pp. 1355-1363, 2010
- 10) 社団法人日本建築学会編: 建築学用語辞典, 岩波書店, 1993
- 11) 森岡清美他編: 新社会学辞典, 有斐閣, 1993
- 12) 濱嶋朗他編: 社会学小辞典(新版増補版), 有斐閣, 2005
- 13) 小玉徹, 大場茂明, 檜谷美重子, 平山洋介: 欧米の住宅政策 イギリス・ドイツ・フランス・アメリカ, ミネルヴァ書房, 1999
- 14) 小井戸彰宏編著: 移民政策の国際比較, 明石書店, 2008
- 15) 富岡次郎: イギリスにおける移民労働者の住宅問題, 明石書店, 1992
- 16) 長谷安朗他編: バングラデシュの海外出稼ぎ労働者, 明石書店, 1993
- 17) Elaine Kempson: Overcrowding in Bangladeshi households, Policy Studies Institute, 1999
- 18) UK National Statistics: United Kingdom Census 2001, UK National Statistics Publication, 2004
- 19) イギリス国家統計局: UK National Statistics, http://www.towerhamlets.gov.uk/lgs1/351-400/367_census_information.aspx, (2011-09-01 参照)
- 20) タワーハムレッツ・ロンドン特別区: 2001 Census-LBTH Ward Profiles, <http://www.ons.gov.uk/ons/index.html>, (2011-09-01 参照)
- 21) 法務省入国管理局: 在留資格一覧表, <http://www.moj.go.jp/NYUKAN/NYUKANHO/ho12.html>, (2011-09-01 参照)
- 22) 法務省入国管理局: 在留外国人統計(統計開始は昭和34年、以降、昭和39, 44, 49, 60, 62年、平成1, 3, 5, 7-20年は統計あり ※明記した以外の年は統計をとっていない), 法務図書館
- 23) 法務省大臣官房司法法制部司法法制課: 出入国管理統計年報(統計開始は昭和36年、以降毎年統計あり), 法務図書館
- 24) 東京都総務局統計課人口動態統計係: 国籍別外国人登録人口, <http://www.toukei.metro.tokyo.jp/gaikoku/ga-index.htm>, (2011-09-01 参照)
- 25) 北区地域振興部地域振興課統計調査係: 平成17年国勢調査, <http://www.city.kita.tokyo.jp/cgi-bin/search/digital.cgi?search=1>, (2011-09-01 参照)

<研究協力者>

Shakila KAYUM: Bangladesh University of Engineering and Technology
後藤 匠: 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻